



写真=幸田 森

終わりなき「挑戦」

谷川浩司 (将棋棋士)

史上最年少の21歳で名人位に就き、
棋界をリードし続けてきた天才の華やかな棋士人生は、
挑戦を受けてきた者にしか知りえない苦難の連続でもあった。
そして今、自身の最年少記録を塗り替えようとしている
未曾有の才能に、谷川浩司は何を見ているのか。
さらに、現役棋士としての現在地は――。

（王位・棋聖）と、これまでに五人誕生しています。

谷川 棋士になつた当時の私は、終盤の力だけで勝っていました。もちろん、当時の将棋界全体のレベルもありましたが、プロ入りした時点での実力を比べると、羽生さんや渡辺さん、藤井さんには到底及びません。

それでも中原誠一六世名人や米長邦雄永世棋聖、加藤一二三九段といったトップの先生方と対局することで、少しずつですが力をつけていました。ただ、棋力が上がつくると課題も見えてきて、トップ棋士との力の差を改めて感じるようにになつたのを覚えています。

——谷川先生の終盤力は「光速流」の異名で知られ、デビュー当時から最速の勝ち筋を読み切る力が傑出していました。それでもトップ棋士との力の差が存在したのでしょうか。

谷川 銳く攻め込む部分や、一直線の寄せ合いでは勝負できても、中盤戦でのねじり合いや、お互いに攻めと受けの選択肢の多い曲線的な展開ではまったく力が及ばないことを自覚していました。その部分は、実戦と研究を重ねて力をつけていくばかりませんでした。

——棋譜データベースはおろか、パソコンすらほとんど普及していなかつた時代でしたが、研究は棋譜並べが中心だったのでしょうか。

谷川 棋譜並べをはじめ、棋士や奨励会員ら一

〇人くらいで実戦形式の研究会を行つていました。ただ、高校までは学業が忙しく、研究する時間がなかなか取れませんでした。だから将棋に専念できるようになったのは、高校を卒業してからです。南芳一九段、福嶋文吾九段、脇謙二八段、それと私の弟子である井上慶太九段などが研究会の主なメンバーでした。

「名人位を一年間預からせていただきます」

——谷川先生は一九八三年、二一歳の時に加藤一二三九段との名人戦七番勝負を制し、史上最年少名人となりました。その際、「名人位を一年間預かせていただきます」とおっしゃったことは有名ですが、それは謙遜ではなく本心からだったのでしょうか。

谷川 いわゆる「五五年組」ですね。二〇代とかばになると、昭和五五（一九八〇）年度にプロ入りした高橋道雄九段、中村修九段、島朗九段、南芳一九段、塚田泰明九段といった棋士たちとタイトル戦を争うことが増えてきました。この世代で過半数のタイトルを保持したこともありましたが、私の場合、皆さんより四年ほど早くプロ棋士になっていたので、年齢は近くても、当時はあまり同世代という感じはしませんでした。

——谷川先生とほぼ同期の田中寅彦九段が、たびたび「谷川は強くない」「あの程度で名人」などと挑発するような発言を繰り返し、対抗意識をむき出しにしていました。ただ、のちに谷川先生が日本将棋連盟会長に就任された際には田中九段が専務理事としてサポートされるなど、関係性はだいぶ変わつたように感じます。当時の状況はどうだったのでしょうか。